
ポケットモンスター レグルス

Ferix

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスター レグルス

【Nコード】

N3460Z

【作者名】

Ferix

【あらすじ】

D・H団リーダーであるターナーの世界征服に立ち向かう、主人公のカズキとそのポケモンたちとの話である

少し執筆者の妄想も入ってます。

episode 1 旅の予兆（前書き）

Ferixです！

基本はゲームをプレイしてるのを基準にしています

初投稿なので下手ですがよろしくお願いします

episode 1 旅の予兆

ここはポケモンと人間が共存する世界

ポケモンと人が協力し合い生きている

ポケモンを使い「悪」をはたらく人間もいる

いままでにもたくさんそんなことあった

俺も2回そんなことがあった

一つはハウエンで、もう一つはトーホクで

チャンピオンにもなったが、そんな器じゃないし、いろんな地方にも行きたい

3

「次はどこいくかな」

「どこに行くの？」

その声が聞こえて目の前が何かで覆われる

「ミドリか？」

「当たり前」

こいつはハウエンで住んでいた家のお隣さんだ
同じ年でちよっとうるさい奴だ

「久しぶりだな、いつ以来？」

「うーんと、こおりの島だよね最後」

「そうだったわけ？」

「うん、そんなことよりどこに行くの？」

「他の地方だよ」

「他の地方でもチャンピオン狙うの？」

「まだちゃんと決めてないけど、まあ最終的にはそうなるんじゃないかな」

「どこの地方にするの？」

「ジョウトにでも久しぶりに帰るかな」

「えっ、カズキ君ってジョウト出身なの！？」

「ああ、言ってなかったっけ。父さんはもともとウツギ博士の助手をしてたんだ。それでその後母さんと俺のふたりでミシロに引っ越したんだ。そしたら父さんはトーホクの研究所を任されてまた引っ越したんだ」

「そうだったんだね」

「ああ、まあそれ以外にもジョウトに行きたい理由はあるんだけどな」

「なにになに？」

「まえにギンノさんがジョウトのシロガネ山に強いトレーナーがいるっていったからさ」

ギンノさんはトーホクのチャンピオンであり、水の都アルトマーレジムのジムリーダーだ。昔、銀色の魔女と言われてたらしい。

「さすがチャンピオンだね、強いトレーナーがいるとすぐに食いつくねえ」

「別にいいだろ」

「悪いなんかいつてないよ、それより私も連れてってよ」

「え、なんで？」

「別にいいでしょ」

「まあ、別にいいけど…」

「ありがとう！じゃあ荷物取りにいかないかね」

「そうだ、トーホクに家あんの？」

「借りれる場所ないからカズキくんのお母さんに頼んで荷物置かせてもらってるんだ」

「今初めてしつたよ…」

「とりあえず荷物取りにいかないとね」
「ああ、そうだな」

くハクジタウンく

「ただいま、母さん」
「お帰りなさい、カズキ」
「おじゃましてーす」
「あら、いらっしやいミドリちゃん。カズキが女の子連れてくるなんて」

「荷物取りにきたただだよ、母さん」
「あら、またどっかにいくの」

「うん、ジョウトにいこうと思ってるんだ」
「懐かしいわね、ジョウト。母さんも行こうかしら？」
「くるの!？」

「冗談よ、母さんは家守らないといけないしね」
「そっか、じゃあちよつと荷物つめてくるよ」

階段を登る二人

このときまだ誰もなにが起こるかは知る由も無かった

episode 1 旅の予兆（後書き）

3日に一度かけるようにいたしますのでお願いします

e p i s o d e 2 船内での出会い（前書き）

なんか…ビミョーです…

episode 2 船内での出会い

「準備できたか？」

「できたよ」

「よし、じゃあ行くか」

階段を降り、母に挨拶をつけると二人は外にでた

「カズキ君、どうやって行くつもり？」

「アーシア島からジョウトのタンバに向かって船がでてるはずだからそれに乗って行くよ」

「じゃあアーシア島に行こう！」

ポケットからボールを取り出し空に向かって投げると、なかからトロピウスとドラドーンがでてくる

「トロピウス！【そらをとぶ】だ！」

「ドラドーンも【そらをとぶ】よ！」

二人は空に上がった

ちなみにふたりの手持ちは

カズキ

トロピウス

ファマイン

フローリア

バフォット

リーフィス

ガブリアス

ミドリ

ドラドーン

エレキブル

ユニサス

タテボーシ

ブーバーン

プラネム

「このままアーシア島までいくぞ」

同時刻 レンジャーベース

「テテレテッテレー、モスギスさん登場！」

「やあモスギスどうしたんだい？」

「ジャッキーに報告があるので、ななな、なんと！ターナーが動きだしました！」

「それは本当かモスギス！？」

「はい、これはポウがつかんだ情報なのでしんじるべきでふ！」

「狙いはどこかわかるか？」

「あはい、ターナーはジョウトを狙ってるようです」

「わかった、モスギスは先にジョウトにいつていてくれ、俺はナツユキと後から行く」

「了解！」

（戦いがまた始まるのか…）

2日前 ポケモン城

「もう一度このポケモンを使うとはな、いつかの復讐を、恐怖を見せてやる。お前の大切なものがなくなるのはお前のせいだと感じるがいい、ククク…」

冷たいその笑い声は静かに闇に消えていった

現在 アーシア島

「ちょっとチケット買ってくるから待っててくれ」

「私もついていこうか？」

「別にいいよ、お前の分も買ってくるから」

「そう？ありがとう」

そういうとカズキはチケット売り場に向かって歩きだした

（暇だなー、カズキ君ってポケモンのことばかりだなー、ちょっとは見てくれてもいいのに）

チケット売り場から戻ってくるカズキ

「ほら、これ船のチケット」

「ありがとう、いくらだった？」

「あー、別にいらねーよ」

「えっ、いいの？」

「別にいいよ、ほら早く行くぞ」

「う、うん。ありがとう」

船に向かって歩き出すふたり

船に乗り込み部屋を、探す

「にしてもでかい船だね」

「まあ豪華客船だしな」

「そんなお金どこにあったの…？」

「なんか、トレーナーがたくさん勝負しかけてくるからいつの間にな」

「へー、そうなんだ」

そして自分の部屋番号をみつけるミドリ

「あつ、私ここだ」

「俺は隣だ」

「偶然だね!」

「そうだな、とりあえず荷物置いてくるからまた後でな」

「うん!」

部屋に入るふたり

「へー、結構大っきいなこの部屋」

この部屋は1人部屋にしてはおおきい

「でてこい、みんな」

ギャーオ

「疲れをとつといてくれよ」

そういうとカズキは部屋をでて隣の部屋をノックする

「おい、まだか?」

「いま行くー」

そういうと部屋からでてくるミドリ

ミドリは後ろで髪をくくっていて可愛らしい、一般にオシャレな服をきていた

（うつ、か、可愛い）

「?、どうしたの?」

首をかしげるミドリ

「な、なんでもねーよ／＼／＼　　そ、それより早くいこーぜ、お腹すいてしょーがねーよ」

「そうだね」

そうして船内を歩くふたり

（な、なんか緊張してるし!頑張れ俺!）

「いつみても広いなー」

「そ、そうだな」

「どうしたの?」

「な、なんでもない」

「ふうん」

いろいろ見て回っているとうしろから声が聞こえてくる

「あれ？カズキ？」

ふりかえると見たことがある人がいた

「あなたは、ユウキさん！」

episode 2 船内での出会い（後書き）

コメント待ってまーす

episodes バトル大会（前書き）

やっばで///ショーです...

とりあえず三話目ですー！

episode 3 バトル大会

「あなたは、ユウキさん！」

「やっぱりカズキか！えっと…こちらの女の子は？」

「あつ、はじめまして、ミドリです」

（かつこいい人だなあ）

「よろしく、俺はユウキ！ んん？ミドリって確かハルカのいとこにもいたような…」

「そうなんですよ、ハルカお姉ちゃんといとこです。ユウキさんの話はよくハルカお姉ちゃんからきいてます。ホウエンのチャンピオンになったってききました」

「あの時はおれもポケモン図鑑を集めてたしさ。それよりふたりもジョウトに何しにいくんだ？」

「俺の故郷なんですね」

「へえそうだったんだな」

カズキはユウキになぜホウエン、トーホクに来たのかをばなす

「そうだったんだな、やっぱりジョウトでもチャンピオン狙うのか？」

「もちろんですよ！それよりユウキさんはジョウトに何しにいくんですか？」

「まあ、ちよつとな…」

首をかしげるカズキ

「そうだ！いまからご飯食べるんですけど、ユウキさんもどうですか？」

「俺はさつき食べたからいいよ、それより8時からポケモンバトルの大会があるんだけどでないか？」

「でますでます！」

「私はやめときます、自信ないんで、」

「ならカズキ今からエントリーしに行くつもりだからお前の名前もかいておくよ」

「お願いします」

ユウキは去っていく

「ねえ、カズキさんとユウキさんはどっちがつよいの？」

「一勝一敗だよ」

「互角なんだ、私なんか一回もカズキくんを買ったことないのに、ユウキさんはすごいな」。出なくて正解だったね！

「まあ、だてに伝説の名をしょってないよな」

「伝説の名？」

「えーと、一年前にホウエンで異常気象あっただろ？」

「カズキくんが解決したやつでしょ？」

「そうだ、それと同じような事件がその時から3年前、つまり今から4年前にもあったんだ。それを解決したのがユウキさんだったんだ」

「だから伝説なんだね」

「そーゆーことだ」

「今回のバトルでどっちが伝説の名にふさわしいか決まるかもね！」
「かもな」

食事を済ませたふたりは一旦部屋に戻りポケモンを連れてきた

そして、ミドリは観客席にカズキは大会出場者の控え室にむかった

そこにはトーナメント表があった

そこには32人の名前が書かれている

「俺たちは決勝で戦うみたいだな」

うしろからユウキが話しかけられる

「そうみたいです、ユウキさん。負ける気はないですから」

「それはこっちもだよ、カズキ。全力を出し切ろう」

従業員出口からスタッフが出てくる

「それでは今から大会のルール説明をいたします。バトル形式はシングルバトル。ポケモンは3匹です。それではいまからポケモンのエントリーをいたしますので呼ばれましたらこちらまでお願いいたします」

（3対3か：どのポケモンでいくかな）

「ヒイラギ カズキさん、こちらまでどうぞ」

（あいつらにしよう）

エントリーパネルに打ち込む

「それでは、いまから一回戦をはじめます！ユウキさん、こがねさんお願いします」

スタジアムに出て行くふたり

「ユウキさん、がんばって下さい」

ユウキは親指をたててみせる

そして、大会の幕があけた

episode 3 バトル大会（後書き）

次はとうとうバトルです。

しばらく続きます

episode 4 一回戦（前書き）

初のバトルです！

結構むずかった 笑

episode 4 一回戦

「それでは、今から第一回戦を始めます。両者前へ、礼！」
頭を下げるふたり

「では、バトルスタート！」

「いけっ、フィニクス！」

「いつてこい、ライチュウ！」

ユウキはフィニクス こがねはライチュウをだした
相性はすこしユウキが有利だ

「フィニクス上空飛行だ！」

「ライチュウ「十万ボルト」だ！」

「かわせ！フィニクス！」

電気をかわすフィニクス

「フィニクス、「火炎放射」！」

「ライチュウ！「高速移動」で相手の下に逃げる！」

ライチュウは素早くうごきフィニクスの下まで逃げる

「ライチュウ！「ボルテッカー」！」

「フィニクスかわせ！」

しかし、ライチュウの攻撃をくらい地面に倒れるフィニクス

「がんばれフィニクス！」

「ぐ、ぐー」

なんとか持ちこたえたフィニクス

だが、体力はかなり減っている

「ライチュウとどめの「十万ボルト」！」

「チューー！」

十万ボルトがフィニクスに直撃する
「くー」

弱々しいこえをだすフィニクス
そして、

「フィニクス戦闘不能ライチュウの勝ち！」

「よくやったぞ、フィニクス」

ボールにフィニクスを、もどす

「頼んだぞ、エルレイド！」

「ライチュウ「十万ボルト」！」

「エルレイド！「まもる」！」

十万ボルトは跳ね返された

「エルレイド、「サイコカッター」！」

サイコカッターをモロにくらったライチュウは倒れた

「ライチュウ戦闘不能！エルレイドの勝ち！」

「もどれ！ライチュウ、いけっ、ゴローニャ！」

「エルレイド、「リーフブレード」だ！」

「ゴローニャ「じしん」で相手を足止めするんだ！」

身動きの取れないエルレイド

「ゴローニャ「あなをほる」」

「エルレイド、感覚で相手の場所を感知しろ！」

エルレイドは全身の神経に集中してゴローニャの場所をさがしている

「今だゴローニャ！」

「エルレイド、うしろだ！「リーフブレード」！」

リーフブレードをくらったゴローニャは倒れた

「ゴローニャ戦闘不能！エルレイドの勝ち」

「ゴローニャもどれっ、いけっ、ルカリオ！」

「エルレイド、「インファイト」」

「ルカリオ！「はどうだん」だ」

「エルレイド、つつこめ！」

エルレイドの目の前に、はどうだんがきた瞬間

「エルレイド「高速移動」」

エルレイドはルカリオのうしろにまわりこんだ

「今だエルレイド！」「インファイト」だ！！」

ルカリオに直撃する

「ルカリオ戦闘不能！エルレイドの勝ち！よって、勝者ユウキ！」

ワァー

観客席からどつと歓声がわく

「強いですね、ユウキさん」

「いえ、こがねさんもですよ」

「いい戦いでした。また機会があればバトルしましょうね」

「もちろんです」

握手を交わすふたり

そのころミドリは

「やっとポップコーンGET！」

「さすがですね、ユウキさん」

「ありがとう、カズキ。次はお前だ、がんばれよ！」

「ありがとうございます」

そしてカズキのときがやってきた

「じゃあいつてきます、ユウキさん」

「おお、がんばれよ」

「絶対優勝する！」

episode 4 一回戦（後書き）

とくに書くことはありません！

それでは次回をお楽しみに、

episodes 九回戦（前書き）

章に分ける事にしました！

あと第九回戦ですが、あいだの第二―七回戦はストーリーに関係ないので省略します、

では、お楽しみください

episode 5 九回戦

「それでは、第九回戦を始めます！両者前へ、礼！バトルスタート！」

「いけっ、リーフィス！」

「行くしかないんじゃないの？ドラドーン！」

第九回戦が始まったそのとき

「間に合った、トイレ混んでるんだもん。あ、ちょうどカズキ君だよかった！頑張れ、カズキ君」

カズキ視点

「さっさと終わらせよーぜ、まあすぐ終わるかw」
挑発をする相手

「そうだな、そっちがすぐ終わるな」

「はあ、舐めてんのか？お前なんかあ5分でかたずけてやんよお」
「ならさっさと始めようぜ、」

「こいよお」

「いくぞ！リーフィス！「冷凍ビーム」！」

「ドラドーン、「ハイドロポンプ」」

ふたつの技がぶつかり合う

「ドラドーン、「バグノイズ」かましちゃってー！」

「リーフィス、「まもる」」

間一髪のところでももるリーフィス

（確かにつよいな…けど隙が多いからいける！）

「リーフィス、「冷凍ビーム」！」

「何度やっても同じ、「ハイドロポンプ」」

「今だ、「はっぱカッター」！」

はっぱカッターはハイドロポンプにあたり消えてしまいが、水に裂け目ができ、その間に冷凍ビームがはいる

そして、ドラドーンに直撃した

「ドラドーン戦闘不能！リーフィスの勝ち！」

「やるじゃねーか、お前」

「俺を舐めんなよ」

「次はこいつだ、いつてこい！ドルマイン！」

（ドルマインか…相性は普通か）

「ドルマイン、「シグナルビーム」やっちゃって」

「リーフィス「冷凍ビーム」！」

相打ちとなり技が掻き消される

「ドルマイン、「十万ボルト」うっちゃって」

「リーフィス「まもる」！」

そして、まもりの壁が消えたとき

「このときを待ってたぜ！ドルマイン、「だいはくはつ」！」

（しまった！！）

「リーフィス、ドルマイン共に戦闘不能！」

「だいはくはつでくるとは思わなかっただろ？」

「ああ、まえの十万ボルトはおとりでまもるを釣ったって訳か」

「そのとおり、それでまもるのあとのインターバルを狙ってドカー

ン！！って訳だよ」

「おれは一枚噛まされたってことか、だがなあ、おれにも策はある、いけっ、ファマイン！」

「レッツゴー！ゲンガー！」

「ファマイン！「かえんほうしゃ」！」

「ゲンガー、JUMPしてよけちゃって」

「ファマイン！「シャドーボール」」

「ゲンガー「シャドーボール」」

「ファマイン！「十万ボルト」」

「ゲンガー！」「サイコネシス」

ほぼ互角のたたかい

「ファマイン、「シャドーボール」」

「なんどやってもおなじだ！」「シャドーボール」

「ファマイン！」「ジオインパクト」！」

シャドーボールをはなつたインターバルでジオインパクトをモロに受けるゲンガー

「ゲンガー戦闘不能！ファマインの勝ち！よって、勝者！カズキ！」

「強かったカズキ」

「いえ、お前もだよ！」

こうして第九回戦はおわった

episodes 九回戦（後書き）

感想、コメントなど待ってまーす

e p i s o d e 6 決勝戦 - 1 (前書き)

やっぱり難しいなあ

変なところあるかもですけど楽しんでください！

episode 6 決勝戦 - 1

「それでは、いまから決勝戦を始めます！両者、礼！バトルスタート！」

決勝に進んだ二人の試合は審判の合図で試合がはじまる

「どっちが勝つかなあ、どっちも勝つなんて無理だし、迷うよー」
観客席から見ているミドリ

そして、ユウキはフィニクスを、カズキはリーフィスを繰り出した
「二人ともいままでの試合で2体しかポケモンだしてないからなあ。
三体目で勝負がきまるわね」

ふたりのバトル展開を予想するミドリ

カズキ、ユウキ視点

「リーフィス、「冷凍ビーム」！」

「かわして、「火炎放射」だ！」

「リーフィス「ハイドロポンプ」！」

「フィニクス、「エアスラッシュ」？」

「リーフィス！「まもる」だ！」

互角な戦いを見せる二人

（さすが、ユウキさんだ。隙がまったくない…）

（まもるは厄介だな、どう攻めるか…）

「フィニクス、「火炎放射」！」

「リーフィス「冷凍ビーム」でかき消すんだ！」

ぶつかり合う二つの技

砂ぼこりが舞う

「今だ、フィニクス！」「オーバーヒート」！」

「リーフィスかわせ！」

しかし、不意をうたれたリーフィスは完全によけることはできなかった

「リーフィス、がんばれ！」「はっぱカッター」だ！」

「フィニクス、「火炎放射」で焼き尽くせ」

はっぱカッターは相手の気をひくためのものだったが、炎で焼かれてしまう

（くそっ、どうしたらいいんだ…）

「今度はこっちから行くぞカズキ！」「エアスラッシュ」

「「まもる」だリーフィス」

まもるでエアスラッシュを防ぐリーフィス

「今だ、「流星群」！」

まもるのインターバルを狙ったその攻撃は見事にリーフィスに直撃した

そしてリーフィスの目はとうとう回ってしまった

「リーフィス戦闘不能！フィニクスの勝ち」

「よしっ」

「戻れっ、リーフィス。よくやってくれた」

ボールをポケットに入れ、つぎのボールを取り出す

「いけっ、ファマイン！こっちから行きますよ、ユウキさん。「火炎放射」！」

「とっちも「火炎放射」だ」

ぶつかり合う技、しかし、フィニクスの方が押されている

（オーバーヒートと流星群の後遺症か、そのせいで火炎放射の力が弱まっている）

「ファマイン、「シャドーボール」」

「フィニクス「火炎放射」で防御」

しかし、後遺症で弱まった力で防げずにシャドーボールはフィニクスへ直撃した

「まだだ、フィニクス！上に向かって「エアスラッシュ」だ」

上にエアスラッシュをはなったフィニクス、その直後上から乱雑におちてくる空気の摩擦

「ファマイン、「十万ボルト」で防げ！そのまま、「シャドーボール」

落ちてくる空気の摩擦を防いでそっちに気がいつてる隙にシャドーボールをあてる

体力もかなり消耗していまフィニクスはシャドーボールが直撃して倒れる

「フィニクス戦闘不能！ファマインの勝ち！」

お互いの手持ちは2体ずつになって試合は中盤に入った

episode 6 決勝戦 - 1 (後書き)

次回に続きます、

コメント、質問など待ってます！

episode 7 決勝戦 - 2 (前書き)

決着がつきます！

episode 7 決勝戦 - 2

決勝戦中盤

お互いの残りポケモンが2体になった

「たのんだぞ！エルレイド！」

（エルレイドか、相性わるいな…）

「一気に決めるぞフアマイン！「シャドーボール」！」

「エルレイド、「サイコカッター」で防げ！」

飛んでくるシャドーボールをサイコカッターで防ぐ

「そのまま「高速移動」だ！」

「フアマイン「十万ボルト」を乱れ撃ちだ」

乱雑に動く強い電流のせいでうまく相手に近づけないエルレイド

（考えたな、カズキ。あの手を一か八かでやってみるか）

「エルレイド、突っ込め！」

「フアマイン、見切るんだ」

「エルレイド、「サイコカッター」を後ろに撃て！」

サイコカッターを後ろに撃ってブーストがわりにすることで動きが速くなる

（速い！このままじゃやられる、これしかない）

「フアマイン、相手をひきつける！」

「エルレイド、チャンスだ！「インファイト」！！」

「今だフアマイン「じばく」！！」

「なんだって！……！」

フアマインのじばくは都市一つを壊滅させるほどの強さがあるといわれている

それを、ほぼゼロ距離でくらって耐えるはずがない

「フアマイン エルレイド共に戦闘不能！」

「よくやった、ファマイン」

「休んでくれエルレイド」

「それではお互いポケモンを出してください」

「やっぱり強いな、カズキ！」

「いえ、ユウキさんもですよ。伝説の名がなによりの証拠ですよ、でも負ける気はちつともありません」

「こっちもだ。お互い最後のポケモン、悔いのない戦いにしよう」
「もちろんです」

「いけっ、ディザソル！」

「たのんだぞ！オルマリア！」

「オルマリアか…ギンノさんに連絡したのか？」

「大会が始まるまえにギンノさんに連絡したんですよ」

〈大会前〉

「はい、オルマリアにもバトルの楽しさを教えたいんで」

「そう、わかったわ。けれどもくれぐれも無茶なことはいないでね」

「わかりました」

そしてオルマリアが入ったモンスターボールが届く

「ありがとうございます」

「じゃあガンバってね」

通信がきれる

「大丈夫かしら…」

〈回想終了〉

「じゃあ行きますよ、ユウキさん！」

「ワタシ ガンバル」

「こいつ、カズキ！」

「オルマリア！」「シグナルビーム」！

「ディザソル！」「高速移動」でかわせ！」

「オルマリア！よく見るんだ！」

「今だディザソル！」「つじぎり」

後ろに回り込んだディザソルはつじぎりをくりだす

「かわせ、オルマリア！」

しかし、速さに追いつけず喰らってしまう

「大丈夫か！オルマリア」

「ダイジョウブ……」

「よし、オルマリア「きあいだま」」

「ディザソル！」「高速移動」でかわせ！」

（あの高速移動を防がないとだめだ……）

「オルマリア、回れ！」

（回る？）

「オルマリア、「シグナルビーム」だ！」

オルマリアを中心に描かれたシグナルビームの円は速い動きのディザソルに当たりそうになる

しかしギリギリのところディザソルは円の同じ方向に回っている
ので当たらない

「今だ！ディザソル「あくのはどう」！」

そして、あくのはどうを放つディザソル

回っていたのでよけることなどできないオルマリアはくらってしまう
そして

「オルマリア、戦闘不能！ディザソルの勝ち！よって勝者ユウキ！
！」

ワァー ヒューヒュー

歓声がどつとわく

いいバトルだったぞー
かっこいいー

どっちもよく頑張った！

いろんな声が聞こえてくる

「よくやったぞ、オルマリア」

「ゴメン ネ…」

「いいんだ、ゆっくり休んでくれ」

オルマリアをボールに戻す

「おめでとうございます、ユウキさん」

「ありがとう、カズキ。なかなかいい戦いだった」

「ええ、またバトルしましょうね」

「もちろんだ」

〈表彰式〉

「ユウキ殿、今大会での優勝おめでとう。優勝カップトロフィーと高級ポケモンフーズ一年分を贈与します」

「ありがとうございます」

ワァー

おめでとー

また歓声がわく

「それでは、ひきつづき船の旅をお楽しみください」

そして、バトル大会は幕をとじた

episode 7 決勝戦 - 2 (後書き)

次回からストーリーが進みます！

ご期待を！

e p i s o d e 8 恋の予感（前書き）

あけましておめでとうございますo(^ ^)o
執筆し始めて一ヶ月もないですが今年もよろしく願いします！

それではe p i s o d e 8お楽しみください

episode 8 恋の予感

「大会後、レストラン」

「あゝ、俺の一勝二敗かぁー」

「まあそんなに落ち込むなよ」

「ユウキさん強いですね！今日初めてみましたけどすごかったです！」

「そうかな？まあカズキも強かったけどな。今度はミドリともバトルしたいかな」

「そ、そんな私なんかそんな強くないですよ」

「はは、冗談だよ。おっともうこんな時間か…」

時計をみると11:30を指していた

「じゃあ俺は部屋に戻るな」

「あっおやすみなさいユウキさん」

「おやすみなさい」

「ああ、おやすみカズキ、ミドリ」

そしてユウキと別れた二人も部屋へ向かう

「ユウキさんかっこいいなぁー」

「そうだな、あのひとは……っつ！」

腹を抱えてその場にうずくまるカズキ

「どうしたの！？カズキくん！！大丈夫！？ねえ！カズキくん！！」
意識が遠くなっていくカズキ

「医務室」

「ん、んん…」

ゆつくりと目を開けるカズキ

「目がさめましたか？」

白衣を着たおじさんがはなしかけてくる

「えっと…ここは？」

おじさんに問いかけるカズキ

「医務室ですよ、そこのお嬢ちゃんが汗かいて運んできてくれたんだよ」

自分の寝ているベッドの体のほうを見るとミドリが寝息をたてて寝ていた

「そうとう君の事が大切だったんだね」

そういうと、医者はカズキが重度の胃もたれでありすぐに点滴をうつて一日寝れば治ることを告げて個室をあとにした

部屋にある時計を見るカズキ

（１時か…結構寝てたんだな…）

ふとミドリをみる

（普通に寝てるとかわいいのにな… それにしても、俺のために頑張ってくれるなんてな）

手をミドリの頭にあてるカズキ

「ありがとな、ミドリ」

そのときカズキは心の奥で何かが動いたのだが、カズキはまだその正体に、気づかないのであった

（夜中３時）

ミドリは目を覚ました

「寝ちゃったな、にしてもカズキくんの寝顔かわいいな」
ほっぺたをツンツンするミドリ

「んんー」

夢でも見てるのかミドリの指をつかむカズキ

「ち、ちよっとカズキくん！」

腕に抱きつくカズキ

（別に嫌じゃないかも／＼）

顔を紅くするミドリ

（やっぱり私、カズキくんの事が好きなのかな。いつか伝えなきゃね！）

そしてそのまま眠りについたミドリであった

episode 恋の予感（後書き）

小説の序盤にフラグをたてておいたほうが楽なのでそうしました

episode ジョウト上陸(前書き)

episode お楽しみください！

episode 9 ジョウト上陸

朝6:00

目を覚ますカズキ

「まだ6時か……………!!!」

隣には寝ているミドリがいた、そこまではいいのだから
ミドリの腕で寝ている状態であった

(こ、殺される…)

「お、おい…ミドリさん…」

ミドリが寝てるか確かめる

……………

(ね、ねてる、よかった…)

身体をおこすカズキ

「あー、よく寝た!」

急に大声をあげておきるミドリ

「!!!!!!、お、おきてた?」

汗が頬をつたう

「当たり前でしょ!重かったんだからね!ほら、腕痺れてる!」

腕を見せるミドリ

「す、すいませんでした!」

その場で土下座をするカズキ

「ち、ちよつと、なにしてるの!?!」

「な、なんでもするから、ゆ、ゆるして!」

全力で謝罪するカズキ

「ち、ちよつと、べ、別にいいつ……………」

黙りだすミドリ

「あ、あのー、み、ミドリさん?」

(やばい、死んだな…)

「カズキくん！」

「は、はいっ」

カズキはミドリの顔をみた

ミドリは不適な笑みをしている

「なんでもするって言ったよね？」

「い、言っただけ…」

「なら今日ジョウトについたらいっぱい奢ってもらっちゃね！」

「ち、ちよつとまってくれよ、俺にもサイフの事情が…」

「文句でも？」

「な、ないです」

負けたカズキ

「やったあ！いっぱい買ってもらっちゃね！」

「はあ、」

落ち込むカズキだが、子供のような笑顔を見せるミドリを見て

（まあ、いつか）

と思うのだった

「ほら、ジョウトにつくの8時だから早く部屋に戻らねーと」

「そうだね！昨日いろいろあってお風呂入れてないからシャワー浴びないと！」

「俺もそうするかな」

医務室をあとにした二人は部屋に戻る道を歩いていた

「あっそうだ、ミドリ」

立ち止まりミドリのほうに向くカズキ

「どうしたの？」

首をかしげるミドリ

「俺が倒れたとき医務室に運んでくれてありがとう」

ミドリに頭を下げるカズキ

「そ、そんなあらためて言わなくていいよ。当然のことをしただけなんだから」

照れるミドリ

そして、部屋に着く

「じゃあまた後でな」

「うん！」

それぞれの部屋に入る二人

くミドリく

「カズキくんに感謝されるなんてなあ」

シャワーを浴びるために服を脱いでいく

「うわっもう7時前だ！急がなきゃ！」

バスルームに向かうミドリ

「早く気持ち伝えないとダメだよなあ」

カズキが頭に浮かぶ

ミドリは顔を紅くする

「なに、考えてんのよ！」

だがミドリの頭から消えないカズキ

「カズキくんは私のことどう思ってるのかな……」

今までのカズキとのやりとりがフラッシュバックする

「決めた！私今日告白する！」

決意を固めたミドリだった

くカズキく

「そろそろジョウトか」

カズキも服を脱ぐ

「ミドリには言う理由がなかったから言っただけだけど、あいつと会えるかな……」

カズキのジョウトへの目的はリーグ優勝とシロガネ山のトレーナーと戦うことだけではなかった

昔ジョウトに住んでいたころの友達と会うことでもあった

「あいつ俺のこと覚えてるかな…」

〈 8 時前 〉

ミドリとカズキは合流してエントランスのソファに座っていた

「カズキくん、そういえばユウキさんは？」

「ああ、ユウキさんならジョウトについたら合流するよ」

「そうなんだ、ジョウトでいっぱい奢ってもらうからね！」

「はいはい、わかったよ」

ピンポン

ジョウト アサギに到着いたしました お客様はお忘れものなくお降りください

「さて、降りるか」

「そうだね」

（あつ、そうだ！）

突然カズキの手を握るミドリ

「おっ、おいっ／＼／」

「はぐれたらダメだからね！」

「わ、わかった」

（やったあ！大成功！）

ぎゅっと手を握るミドリ

（な、なんか緊張する…）

動揺するカズキ

そして、船の外にでた二人

（やっと解放される！）

手をはなすミドリ

「へー、ここがタンバかあ」

「ミドリ、ユウキさんがいるから行くぞ！」

「待つてー、カズキくん」

「よっ、二人とも。相変わらず仲いいなあ」

「そうですか？」

「そうだよ」

肯定するユウキ

「俺もそう思うなー」

突然うしろから声が聞こえる

（この声っ？）

「久しぶり、カズキ」

振り返るカズキ

「お前は……………ヒビキ！」

episode ジョウト上陸（後書き）

とりあえず第一章は完結です

次のからは第二章です！

コメントなど待っています！

episode 10 ヒビキの始まり（前書き）

言ってませんでした、この小説はポケスペなどは含んでおらず、ゲームだけをとった話です

ではepisode 10 お楽しみあれ！

episode 10 ヒビキの始まり

くシロガネ山 頂上く

「はあ…はあ…つ、強い…」

少年、ヒビキは息を切らしていた

「…………カメックス…「ハイドロポンプ」」

「バクフーン！「火炎放射」だ！」

二つの技がぶつかり合い、砂ぼこりがまう

（くっ、よく見えない）

砂ぼこりがなくなるとそこにはバクフーンが倒れていた

「バクフーン！」

バクフーンのもとに走るヒビキ

「よくやってくれた、ボールに戻ってくれ」

ボールにバクフーンを戻す

「お前なにもんなんだ？」

たずねるヒビキ

「俺の名は……………」

一週間後

ピローン

「ん？メールか？」

ウツギ博士はパソコンのメールを開く

「何だって！？」

ウツギはヒビキのポケナビに電話をかける

「はい、ヒビキですけど、」

「ヒビキ君！ウツギだ！いきなりだが、すぐに研究所にコトネくんと一緒に来てくれ！」

「ど、どうしたんですか？って…もう切れてる…しかたないコトネに連絡するか」

ポケナビでコトネに電話をする

「もしもし、コトネか？」

「そうだよ、どうしたのヒビキくん？」

「ウツギ博士がなんか急ぎの用で研究所に来てくれっよ」

「わかった！じゃーね」

「ふう、俺も行くか…」

後ろの大きな山を見て歩き出すヒビキ

ここはシロガネ山ふもと

普通は制限区域なのだが強いと認められた者だけが入るのを許される区域だ

立ち去り際に山に向かってつぶやく

いつかあなたに勝ってみますよ…

……………レッドさん……………

くウツギ研究所く

「思っていたよりはやかっただね、ヒビキくん」

「博士焦ってた様子だったしさ」

「あれ、コトネくんはどうしたんだい？」

「えーと、俺とコトネは別行動なんですよ、一応連絡しといたんでくるとおもいますよ」

「そうだったんだね」

納得するウツギ

「で、なにがあったんですか？」

ウツギにたずねるヒビキ

「それがね…っとコトネくんが来た見たいだよ」

「こんにちわー」

「よくきてくれたね、早速だけど二人ともこのメールを見てくれ」
パソコンの画面を覗く二人

ウツギ博士

久しぶりです、ウツギ博士

いきなりですが、半年前にターナーがトーホク地方で世界征服を企
んでいたのを知っていますね

そして行方をくらましていたターナーの情報が手に入りました

今回ターナーはジョウトを狙っています

なのでそちらの信用の高いトレーナーと協力してほしいです

それに今回は他の組織との関連もあるかもしれないのでこちらから
も何人が助っ人を送りたいと思います

3日後の午前9時にアサギの港に着くので落ち合いお願いします

ヒイラギ

「というわけだよ」

「なるほど、だから俺たちを呼んだんっスね」

「そのとおり、引き受けてくれるかな？」

「もちろんです、このバカは私がちゃんと見ておくので安心して下
さい」

「おいっバカとはなんだよ」

「それでは行ってきます、ウツギ博士」

「無視かよ……」

「ちよつと待つてくれ、二人とも、図鑑を貸してくれるかい」

「あ、はい」

図鑑をウツギに渡す二人

博士はパソコンに繋いで熟練のキーボードうちをしている

「よし、これでOKだ」

図鑑を二人に返すウツギ

「なにしたんだ??」

首を傾げるヒビキ

「4年前にハウエンに隕石が落ちたのは知ってるだろう?」

「あつたりまえじゃん!あの時は凄いニュースに流れてたからな」

「それでその隕石の影響で数年前から新種のポケモンが出てきているんだ、この際だからそのポケモンに対応した図鑑にグレードアップしていったんだよ」

「なるほど、ということは助っ人の人たちは新種のポケモンを持っているんだな、なんかワクワクしてきた!」

「はは、ヒビキくんらしいなあ…では、二人とも頼みましたよ!」

《はいっ!》

こうしてヒビキの螺旋は周りはじめた…

episode 10 ヒビキの始まり（後書き）

前回タンバとかいてましたが正しくはアサギです

改稿しておきます、申し訳ありません

またこの作品が終わったらポケスペの執筆わしいと思いますので
どうかお願い致します

episode 1 理由（前書き）

episode 1 お楽しみ下さい

episode 11 理由

「ウツギ研究所前」

「あと3日あるぞ、どうする?」

コトネにたずねるヒビキ

「そらをとぶじゃ今日中に着いちゃうわね」

答えるコトネ

「まあとりあえ俺ん家寄ってくか?」

そこで考えようぜ、と付け足すヒビキ

「えっと、別にいいけどお母さんは?」

「さつきちよつと覗いたらいなかっただから大丈夫だろうよ」

「変なことしないわよね?」

「するかよ!!!!」

「冗談よ、じゃあちよつとお邪魔するね」

「はあ、こいつといると疲れる……」

ため息をつくヒビキ

「なんかいった?」

作り笑いのコトネ

「なんでもないです」

「ヒビキ家」

「久しぶりに入るなーこの家」

「俺がチャンピオンになったとき以来だっけ?」

ヒビキがチャンピオンになったときパーティーがこの家で開かれた
それにコトネも招待された

「あの時は楽しかったわ」

「そうだったな」

キッチンからコーヒーを二人分持ってくるヒビキ

「ほれ」

コーヒーを渡すヒビキ

「ありがとう」

受け取るコトネ

「ふう、いろんなことがあったな。ロケット団と戦ったし、あの時はダークもロケット団を潰そうとしてたしな」

「そんなこともあったんだね」

沈黙が流れる

「また、戦いが始まるのか…」

「いや」

突然つぶやくコトネ

「えっ？」

「本当はいやだったわ!」

「ど、どうしたんだよ」

「ヒビキくんはなんとも思わないの!? 死んじゃうかもしれないのよ!」

「……………」

黙るヒビキ

「ヒビキくんは怖くないの!？」

目に薄っすらと涙をみせる

「そりゃ怖いさ、でも俺たちがやらなきゃもつとたくさんの命を失うかもしれない」

「でも、私たちがやらなくても!」

「ウツギ博士は恩人だし、手紙に書いてあった”ヒイラギ”っていう名前…あの人の子供は俺の友達なんだ、義理っていうのがあるから俺は動いてるんだとおもう」

「……………」

「だから俺は戦うぜ」

コトネに向かって言葉を放つ

「……………そうよね、私間違えてた。自分のことばかり考えてたわ、ヒビキくんの話きいてそれに気づいたわ」

「コトネ…」

「私も戦う！！私だってつよいんだからっ」

「ありがとう、コトネ！」

二人の距離は縮まっただろう

episode 1 理由（後書き）

이슈はできません

다크っていうのはウツギ研究所のポケモン盗んだ奴ですよー

コメントまってまーす

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3460z/>

ポケットモンスター レグルス

2012年1月10日21時46分発行